

あるソ連兵との思い出

木村 辰 男



この八月にソ連ほか四カ国の軍隊が自由化の嵐吹くチェコに侵入した事件があった。世界の多くの国がこのたびの暴挙を非難し、またソ連の市民の中にさへ祖国の今度の行為に対して批判的な意見をもつ人たちがあつたと聞いている。そしてプラハ市民とソ連兵らとのいろいろな接触の場面が新聞やラジオ、テレビなどを通じて報じられた。中でもプラハ市民が進駐してきたソ連軍の戦車や装甲車をとり囲んでこぶしをふり上げチェコへの侵入をなじった時、その兵士たちが困りきった顔をして、「自分はただ軍の命令に従ってやってきたまでのことだ」と弁明している光景はとくに私の注意をひいた。このこととなんのかかわりもないが、このような報道に接するにつけ、今から二十年余りまえの終戦直後の

満洲で私が出会ったソ連兵のことが思い出されてくるのである。

*

すでに多くの人たちがいろいろの機会に伝えているように、終戦直後の満洲では大きな混乱が起きた。それまで帝国主義的な国家権力の庇護のもとに比較的平穏な生活を送ってきた日本人は、この時を境にして敗戦国民となり、いわば異国にとられの身となつて中国人の憎悪の眼、ソ連兵の横暴なふるまいの下に不安な生活を強いられるようになるのである。

このような状態の満洲で、私はある日、急な用事で遼陽というところから大連に行かねばならないことになった。遼陽から大連までは約三百三十キロあり、急行列車に乗っても

数時間にかかる。停車場へ行ったが、ソ連軍の軍用列車以外に一般人の乗る汽車はいつ出発するか分らないような状況で、途方に暮れながら駅のプラットフォームにつつ立っていた。

すると間もなく大きな戦車・装甲車・トラックなどを満載した貨車と客車を連結した南行きの軍用列車が駅に入ってきた。そして何人かのソ連兵がその汽車から降りてきて、マンドリンと呼ばれる無気味な自動小銃を構えながら列車のまわりを警備しはじめたが、そのうちのひとりが目ざとく私を見付けて、こちらにやってきた。何をされるか知れたものではないと思ったが、いままら逃げ去わるけにもいかないので度胸を決めてそのままそこにじっとしていると、その兵士は私のところに来て立ち止り、ロシア語で何か話しかけた。私がロシア語を解しないことを見とると、彼は「スピーク・イングリッシュ」だとたずねかけてくるのであった。私ははじめ少しうろたえたが、われながら不思議にも英語なら分るような気がしてきたので、ここがチャンスのとらえどころと思った。勇気を出して「しかり、いささか英語の心得あり、ついては折

り入って頼みたいことがある」と前置きし、所用でどうしても大連まで行かねばならないことを告げ、どうか自分のために便宜をはかって貰いたいと頼み込んだ。むろん戦争末期から、軍需工場や北滿開拓団への勤労動員の連続でロクに中学で英語を勉強していたわけではないが、ありったけの知識をしぼり出して、この英語を話すソ連兵に私の意思を伝えようとした。幸い私のいうことが通じたらしく、その兵士は責任者らしい将校のところへ私を連れて行き、そこでしばらく話し合った後、この軍用列車に便乗してもよいという許可をもらうことができた。このようにして私はソ連の軍用列車で大連まで無賃乗車をするようになったのである。

英語を話すところからかなりの学校教育を受けてきた兵隊だと思っていたが、案の定、彼はソ連のある獣医学校の学生だそうで、今度の戦争で応召したとのことである。この軍用列車には彼のほかに学徒兵が多く、独ソ戦が終ってヨーロッパから極東にまわされてきたらしいが、多くの戦友が独ソ戦で戦死したという。

汽車の旅は十五時間ほどもかかったが、私

は車中で彼や、ほかの学徒兵たちと親密になった。彼はソ連の国土、生活などの模様を英語と身ぶりを交えて熱心に話してくれたが、私もまた戦争中の私たちの生活、今後の希望、日本の国土のこと、そのほかいろいろなことを話した。また彼は戦争や平和のこと、植民地の問題についてもいろいろ訴えた。戦時中は学校でもどこでもソ連は共產主義の国で、アカは日本の国体とは相いれない悪い思想だということを徹底的にたたきこまれてきており、ロシア人は鬼のような人間というふうな先入感をいだいていた。しかし彼らに接してみると、そのような考え方やこれまで私が受けてきた教育が何かこっけいで空しいものに感じられてくるのだった。そして言葉

は自由に通じなくても、彼らと真心から語り合うことができる喜びを感じ、自分が敗戦国、彼が戦勝国に属しているというような意識を一時まったく忘れ去ってしまったのである。

こうして車中で私は彼らと食事とともにし彼らの合唱するロシア民謡に聞き入り、また私は日本の唄を歌ったりして夜のふけるのも忘れて車中の時間を過ごした。時おり汽車が中間駅にとまると、新鮮な空気を吸うために

プラットホームに降りて、秋の澄んだ星空の下で彼らとアイネ・クラインやアイーダの行進曲のサワリを口ずさんで団らんの時を過ごした。

お互いの心がしだいに通じあっていた時、私はこの学徒兵に、多くのソ連兵が満洲にやってくるまで粗暴な振舞いをするので日本人や中国人などから嫌われているという話をした。満洲におけるソ連兵の評判について彼はすでに知っており、悲しそうな顔をして声を一段と落して、残念なことと思うがそれがソ連兵全部の姿でないことを信じてほしい、と哀願するようにいうのだった。

そして少し大胆だとは思ったが、私はさらに日ソ不可侵条約がまだ有効な期間にソ連が日本に攻撃をしかけてきたことについてふれて彼の反応をうかがった。これについて彼はかなり驚き、当惑したようだった。彼の返答は要領を得ず、早く話をほかへ転じようと努力している様子がありあろうかがえた。そして最後にとうとう彼は、国と国との関係は複雑な問題だが、われわれは人間と人間との親愛の情を高めることができる、といい出して、この問題にピリオドを打とうとした。敗

戦国民であることを想起して私は深迫いすることをやめ、この話はそれで終ってしまった。われながらいぶん思いきったことを彼にいったものだとなんにも思っていないが、それにもましてあの時のこの学徒兵の困惑した表情が思い出されてならない。

私たちを乗せた軍用列車が終着駅の大連に間もなく着くという時間になって、彼らは私に日本の国歌を歌ってくれとせがんだ。敗戦国の人間が戦勝国の兵士の前で敗戦国の国歌を歌わせられるのは何か見せ物にでもされるようで嫌な気持だったがやむを得ない。しかし驚いたことに私が「君が代」を歌いはじめると、彼ら一同直立不動の姿勢で聞いているのであった。彼らがそのようにしつけられているからではあるが、私が決して見せ物にされているのではないことを知って嬉しかった。ついで今度は彼らがみごとな合唱でソ連の国歌を歌ってくれた。むろん私は直立不動の姿勢で謹聴した。そして次々と私に堅い握手をし、彼をはじめ幾人かの兵士は眼に涙さえ浮かべて別れを惜しんでくれた。

＊

私たちはその時、お互いの名前さえ告げず

に別れてしまった。その後私は間もなく故国に引揚げてきた。それから二十余年の歳月が流れ去り、その間彼の国と私の国の間は米ソの關係に対応して緊張と緩和を繰り返してきた。国と国との關係は、それに属している個々の人間どうしの親愛の情とか感情などとは無關係に、そして冷酷に移すものである。はじめにも断ったようにこの八月のチェコの事件と私の体験とは直接なんの關係もない

し、むろん国と国との關係も、そしてまたそれらがおかれているいろいろな客觀情勢もまったく異なっているけれどもプラハ市民にとり囲まれるソ連戦車兵の複雑な表情を見てみると、私はあの終戦直後の満洲における軍用列車の中でソ連の学徒兵と国境を越えて友情を暖めたことや、またソ連の満洲進出についての意見を求めた時の彼の困惑した表情を思い出すのである。（校友・神戸学院大学助教）

中学校チャペル修復

中学校チャペル（重要文化財）は、一八八五年（明治十八年）に建てられて以来八十三年になり、最近、雨もりがひどくなったので、去る九月以来、屋根のふきかえ、外部木部のペンキ塗りを行ない、このほど修復を終えた。屋根のふきかえは建築以来始めてのことである。また修復に要した形おし鉄板（縦37センチ、横24センチ）は八千枚にのぼり、創建当時はアメリカ製鉄板を輸入したらしいが、今回は日本製を使用した。この修繕に要した経費三百三十万円は京都府文化財保護基金から借り入れた。なお、この修繕とは別に火災、報知機をチャペル内部と門衛所に備えつけ、文化財の保護にあたることとなった。

